宇治先生の想い出

ガストロカメラをめぐって

杉浦睦夫

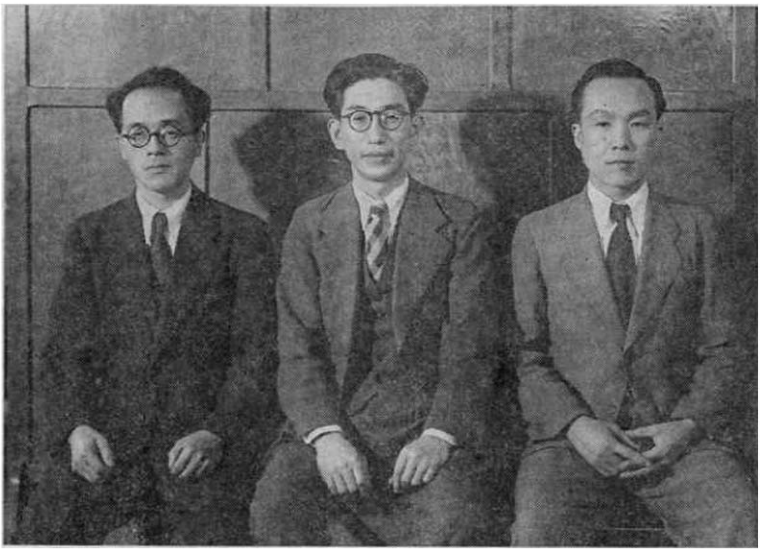
一、出会い

今から数えて三十七年前のことである。中央線新宿行きの準急列車が荒れ狂う風雨の中で立往生をしていた。これに宇治先生と私が乗り込んでいたのである。死者百三十五名を出したキティー台風が関東一円を駆け巡っていた昭和二十四年八月三十一日の夜のことであった。

宇治先生に初めて会ったのはこれより少し前、オリンパスの応接間で中野営業部長に呼び出されて紹介された時のことである。「君、胃袋の中の写真が撮れないかね？ いやレントゲン写真じゃないんだよ。胃袋の壁を内側から撮りたいんだ。つまり胃袋の中へ直接入れるカメラは出来ないものだろうか。そんなことで宇治先生がお見えになったのだが」。私はその時、位相差顕微鏡の開発ということで頭の中がいっぱいであったから、この突然の来客の話に戸惑った。「何とかなるでしょう。光とレンズとフィルムが有れば写真は撮れますから。しかしやって見なければ分りませんがね」。

苦し紛れにそう答えて早々に研究室へ引き揚げたのである。

当時オリンパスの研究所長は諏訪工場副長を兼務し、諏



ガストロカメラ外国特許申請のために
右より深海正治氏(31歳)，宇治達郎氏(32歳)，杉浦睦夫氏(33歳)

訪に常住していた。私は位相差顕微鏡開発の経過を報告し、次の指示を受けるために諏訪に出張した。

工場から借り出さねばならないものもあって三日がかりで打ち合せをし、ほぼ業務が終りに近くなっていた時、工場の女子従業員の声がする。「杉浦さんお客様ですよ。宇治さんとおっしゃる方が」。私はドキンとした。「渋谷へお訪ねしたら、諏訪へ行かれたというので早速後を追いかけて来ました」というのである。目の前の仕事に忙殺されていた私は、数日前の渋谷の応接間での話をすっかり忘れていた。

それにしても宇治先生は何と熱心なことか。大いに恐縮し慌てて応接間に通って頂き、早速文献にある胃鏡の話などをした。「折角お出で下さったのに誠に申し訳ないのですが、私はどうしても今日東京へ帰らなければならないんです」と言うと、「では私もご一緒します」と即座に答が返ってきた。私は帰京の挨拶と共にこの宇治先生の件を研究所長に報告した。「それは君、駄目だよ。腹の中へカメラを入れるなんて！ 第一光がないじゃないか。エネルギー論から言ったって不可能だよ」。所長のけんもほろろの激しい口調が飛ぶ。「お前はそんなことを考えている暇があるのか。位相差顕微鏡の仕事が一刻を争っているこの時に」。言外の所長の思いがビリビリと伝わってくるようで

ある。その時は位相差顕微鏡の開発ということが、オリンパスの社運を賭した第一の課題であったのだから。私はああそうですかと言っては見たものの、内心「よーし出来るという事を実証してやるぞ」と叫んでいた。不可能という言葉に触発されてか、我乍ら思いも掛けぬ重さで、腹の中へ入れるカメラが我が腹の中に住み付いて行ったのである。

八月三十一日午後四時何分、下諏訪発の準急列車に私は宇治先生と乗り込み帰京の途についた。降り続いている外の雨は益々激しさを加えて来る。そして列車が時々駅でもない所に停まるのである。車内はムンムンとして来た。

遂に「暴風雨のため列車は当分動きません」と言うアナウンスである。やれやれこの蒸し風呂のような車中で一夜を明かすことになるのか。それではと覚悟を決め、その夜はまんじりともせずに胃の中を撮る話に熱中した。何しろ体の中のことは皆目知らない技術屋と、光学のことには不得手な医者との議論である。お互いの思い違い行き違いが続く。しかし、日常の仕事から全く遮断されたこの列車内での長時間ディスカッションは、一気に研究の骨組みを作り上げることになった。あとは一つずつの問題点を解決して行けばよい。こうなれば先ず実験だ。早く実験に取り掛りたい。「宇治先生、会社へ来て下さい。僕の所で一緒に実験をしましょう」。

思えば胃カメラ誕生の運命はこの夜決ったのである。宇治先生の執念による諏訪工場訪問。キティー台風のために世の中から隔離された時間。研究所長の「不可能」の言。落語の三題噺のようなこの三つの出来事が無ければ、今日の胃カメラは生まれなかったであろう。もし生まれたとしても、全く別な運命を辿るものとなっていたに違いない。

二、ガストロカメラ

研究所の私の部屋では位相差顕微鏡の一日も早い完成という会社の大号令を抱えて、皆の神経がピンと張りつめていた。いくら会社を一身に背負っているような積もりになって自惚れている私でも、研究所長の許可のない実験をこんな状況の中で堂々とする訳には行かない。皆の帰るのを待って暗室へ入り、こっそりと宇治先生の実験を始めた。先ず本当に写真が写るかどうかの実験である。果して真っ暗い所で僅かな光で胃壁が写るだろうか。

不安である。

闇夜に光るネオンサインを撮る時のことなどをふと思い出す。交流点灯であるネオンは1/100 dec の間隔で明滅しているので、これに合せてカメラを撮り乍ら振ればよい。こんな事が何の脈絡もないままに脳裡をかすめる。

兎に角実験は手近にあるもので始めよう。光源としては懐中電灯(ナショナルの自転車ランプ)を使うことにする。被写体はイルフォードの乾板の空箱。カメラはオリンパス35 f=40㎜。フィルムはデュポンSS ASA 100。先ず距離を至近距離1mに合せて1/100秒でシャッターを切る。F:5.6, F:8, F:11, F:16と何枚も撮って見る。直ちに現像。D72(印画紙用)、室温で4分。

何と写っているではないか。数cm先に置いた懐中電灯で照らされた乾板の箱の印刷文字が黒々と写っているのである。しかもF:11でも文字が読み取れる。これでよし。胃の内壁は撮れるぞ。安心してこれから先の研究が出来るというものである。

宇治先生は九月早々研究所へ現われた。ジャンパー姿でどう見てもお医者さんとは思えないいでたちである。知らない人は見習い社員と見たであろう。早速二人で実験の計画を立てる。胃袋のモデルとしてフラスコがよかろう。レンズは顕微鏡40Xの後鏡を使う。ライトは40Wのスタンドでよい。フィルムは35㎜のポジフィルムが適当だろう等々。

胃袋に見立てたフラスコの側面に方眼紙を貼り水を満たす。25㎜位の金属パイプにレンズとフィルムを固定し、これをフラスコの中へ入れる。鏡を使い、電灯を明滅してフィルムに感光させる。こんな道具立てに自費を投じて宇治先生と何度となく実験を繰返す。

十二月二十四日、街はXマスイブで賑わう夜、実験はまだまだ峠を越さぬままに我々だけで勝手に胃の中を撮るカメラを「ガストロカメラ」と命名したのである。十二月三十日レンズ設計。一月二十日露出タイマー。一月三十日フィルム切断器。電球決定。二月十日レンズ工作。機械工作。二月二十日頃から動物実験。三月一日頃から人体実験。こんなことが私の古い研究ノートの予定表に記してある。この頃には胃カメラは正式とまではいかなくても半ば公然とオリンパスの研究テーマの仲間入りをしていたことは確かなようである。

昭和二十五年十一月五日、臨床外科学会で遂にガストロカメラは世の中に発表され、そして一躍脚光を浴びたのである。

三、横手山越え(省略)

四、多摩川べりで

昭和五十五年七月二日、宇治さんとの連絡がとれて久し振りに会うことになった。

それより少し前の四月十九日から読売新聞に「光る壁画」

という小説が連載され始めていた。私はそんなことは全く知らなかったのであるが、知人が「杉浦さんの実名が小説に出ているよ」とわざわざその新聞を持って来てくれたのである。へえと驚くと共に、まだこの世に実在している人間に取材もせず、何の断りもなく、全くの実名で新聞小説に登場させるということの真意が計りかねた。新聞社に電話を入れると早速作者の吉村さんが訪ねてこられた。「杉浦さんは大病のため生死の境にあるとのことで取材を遠慮した」と言う。すでに始まってしまっている部分を変える訳には行くまいが、私としては実名を使う以上、事実はなるべく曲げないで欲しいと申し出た。

そんなことがあって、私は矢も楯もたまらず宇治さんと話がしたくなり、多摩川の川べりで鮎を食べ乍ら会おうということになった。そして城所さんと今井さんも一緒に駆けつけてくれたのである。「あれから三十年ですね」「お互いに生きていてよかったですね」という挨拶で始まった。「杉浦さん大病をなさったそうですね。全然知らなかった」「心筋硬塞と脳血栓をやりまして、今生きているのが不思議な位です」「宇治さんも病気をしたそうですね」「一寸ね。寝る程ではありませんが、糖が出て十三キロばかり痩せました」など、三十年前の青年達は少しばかり過ぎた年月の長さに思いが到ったのである。しかし話が昭和二十五年十一月五日の臨床外科学会でガストロカメラを発表した時のことに及ぶと俄然熱を帯びてきた。学会からの帰り道、日比谷公園で撮った写真を見乍ら、我々の三十年前の姿はなかなかのものであると悦に入る。今日揃った四人が前列に並んでいるのである。横手山のスキーの話。医局で膿盆を鍋代りにすき焼をした話。この肉は少し前解剖をした人の肉だとからかったら、気の弱い医局員が食べたものをすっかり吐いてしまった話。エーテル麻酔をした兎の肉は臭くてどうにも食えなかった話。軍隊のこと。満洲のこと。それらの話の間には必ず「生きていてよかった」という合いの手が入る。銀座並木通りのレストランアラスカで東大分院と本院それにオリンパスとの間でガストロカメラに関する問題で手打式をやった話。随分と生臭い話まで飛び出してくる。それからそれへと話は尽きず、三時間があっという間もない感じで過ぎた。

又ぜひやりましょうと再会を約して別れたのに、それから半年も経たぬうちに宇治先生が亡くなられてしまった。宇治先生と言うより私には宇治さんと呼んだ方がピンとくる。

宇治さんよ安らかに。あの世とやらで若し再会が出来たら、ぜひ又一緒に仕事をしようではありませんか。合掌。

（昭和六十一年七月　記）